

ます。戦車砲の炸裂でトタンが吹き飛ばされた。何時間寝たのだろうか。陽は高々とあがっていた。隊列を敷いた戦車の後には敵兵がみえる。後方を見ると、垣根越しに友軍の姿がちらつく。壕を飛び出し垣根を遮蔽物にして、戦友の後を追う。

「シュツ シュツ」火を吹きながら曳光弾は文字通り雨あられ、ようやくにして防空壕へ飛び込み十四、五人の兵員と合流することができた。集中砲火を浴びながら「このまま突っ込もう」「できるかぎり避難し陣容を立て直そう」など話合いが下士官、古参兵の間で交わされた。「重機関銃の装備を持っているので一足先に」との決定により二人、三人と壕を飛び出した。敵は待ってましたとばかりに一斉射撃である。一人また一人と倒されていくのを見ながら、死に対する恐怖は少しも感じなかった。

#### 転進作戦

敗残の悲哀をかみしめながら命からがらの掃投であった。日を追うごとに砲撃は激しくなり、一日で山の形が変わるほどに大量の弾丸が打ち込まれる中、転進作戦と

いう、私たちの逃避行が始まった。

ゲリラの襲撃にあい、道なきジャングルや、山蛭に悩まされ、ひとたびスコールが来れば今まで歩いた窪地が濁流の川となる。全員に疲労の色が濃くなる。悪性の赤痢にかかり血便で絶えず軍袴を濡らしながら、精神力だけで追ってくる者、マラリアの高熱で毎日苦しむ人、負傷が化膿して蛆虫がわく者。そして次第に人員もバラバラになっていった。

#### 従軍中の体験手記

兵庫県 加納種 一

はじめに

私は大正十五年現役兵として輜重兵大隊に入隊。二年兵の後期より師団経理部において経理学を学び、満期除隊後、平時進級により主計伍長に任命される。体験記は普通兵科と大分異なります。海難の三回はアメリカ軍の魚雷攻撃を受けたもので、三回とも乗船は沈没した体験

記です。またパラオ島において食糧難の時、主計として苦勞した体験記を記します。

### 体験記

昭和十八年七月二十五日臨時召集にて、歩兵部隊に入隊、海上輸送隊補充要員として、九月中旬門司港出帆、十月六日高雄港を出帆す。十月七日午後十時ごろバシー海峡でアメリカ軍の魚雷を受け、乗船は約二十分くらいで沈没した。これが第一回目の海難である。

どかんと大きな音に目がさめた。船内は電燈は消えて真っ暗、船はぐいぐいとどこかへ落ちこむような思いがしたと同時に、「アメリカ軍の魚雷を受けた。早く早く甲板に上れ」という命令が出た。着のみ着のまま甲板に上る。右側出口の前に船首が横付けになっていたので、救いの船かと思った時、その船首は海中に沈みました。しかし私は自分の官級品、私物が欲しいので船内に降りるべく、階段に足を掛けた時に、隣にいた先任の曹長に殴られました。

なんで殴ったのか尋ねず、さらに降りようとした時、こんどは前より強く殴られました。その時「お前は命が

いらんのか、あほが」と、大きな声で叱られた。「お前は官級品、私物の方が大事なのか。ここにじっとしていろ」といわれた。この言葉が四十年過ぎた今も耳に残り両手を合わせております。

まもなく退船命令が下り、救命筏にたどりつく。私を入れて十二人が乗り満員。早く本船より離れないと船とともに海中に沈む。つないである紐がほどけず気があせる、その時、幸いに軍曹が軍刀で切ってくれました。

約十層ほど離れたと同時に本船は沈みました。ああ助かったとほっとするとともに一難去ってまた一難、救助はいつになるやらと思うと心細い。友がよく眠る、眠る度になぐる。眠ればそのまま他界すると聞いていたからです。

長い夜が過ぎて八日午前十時ごろ、やっと救船来る。大発艇が降りる。私の所へは午後四時ごろにきてくれました。大発艇長がこれ以上救うことはできないと申しましたので、私は若い兵七人と軍曹一人計八人は是非頼むと申し、私ら四人は残ると申しました。

艇長は遅くなくても迎えに来るといわれて、午後五時

半ごろ迎えにきてくれました。夜の星が見えるころ本船につくと波高く船は四五度を左右に動く。昨夜十時より十七時間ほど海中にいたので、足腰が立たずタラップにつく気力もない。困っておりますと、幸いに同僚の軍曹があせるな、ロープをわさにして下ろす。ロープが下りたら同時に両手をわさの中にいれ、タラップにかじりつけ、といわれその通りにしますと、二、三人とともに引き上げて頂きありがたいことでした。

マニラ港に入港。マニラ港出帆、十二月三十一日宇品に上陸、一月三日宇品出帆、豊後水道を南下し九州が見えなくなつたころ、またしてもアメリカ軍の魚雷を受け、二、三時間後に沈む。外地と違い午後三時ごろでもあり近海でもあるので、無事助けられ、佐伯港海軍基地に着いたのは午後九時ごろでした。上陸後早々に入浴をさして頂きましたが、半数ほどが風邪をひき高熱を出して入院しました。私の部隊も曹長、軍曹各一人入院し、内地に残りました。

佐伯港より門司に回り再び出帆しました。九州を左に見て南下。船内を見れば救命具はごく少なく、有事には

半数以上は助からぬ状態です。私ら全員が輸送指揮官と船長に申し入れて、「台湾竹を買って下さい。救命筏を作りませう」と申しました。早々に聞いて頂き高雄で積みこみ、古ロープで縄を作り、玉ねの箱やその他板で梯子を造り各部隊ごとに割り当てた。一月二十三日高雄港をパラオに向けて出帆。

太平洋上で二十六日またしても魚雷を受く。私たちの部屋に魚雷命中、そのショックで二、三人が船外に放り出され戦死す。二月二日残り全員無事パラオ港に上陸す。

三月四日私ら部隊は全員第三船舶輸送指令部に転属す。マラカル島の輸送指令部に転属し主計の任務につく。

アメリカ軍によりパラオ島全体が包囲され、艦砲射撃と敵機空襲下、何一つ内地より届かぬ。糧秣確保が主計の任務となり、持続持久がいつまで続くかわからんが、手榴弾一個を身につけて任務に熱中す。

(一) 一番つらい思い出は部隊長より呼び出され、今日の兵食は何カロリーかとたずねられ報告しますと、そんなカロリーで兵が働けるかと叱られました。不足を補うのは主計の役目だといわれる度に身が縮む思いがしま

した。

(二) 分遣隊員に脚気患者が続出した。加納は今より分遣隊に行き脚気患者を治せという命を受け、本島アイミリキに行く。早々より現地民の家を回って、食べられる青葉ものを教えて頂き、お汁より葉の方を多く与えました。またタロイモも教えて頂き、満腹感を与えるのに役立ちました。患者も五分の一に減り部隊長に喜んで頂きました。

(三) 暁島本部へ糧秣受領に行く。海上輸送より他になく、昼の行動は許されず、闇夜満潮時を利用し、爆音がすれば岸のジャングルに隠れる。このような時には必ずラバウル小唄が口に出る。

煙草は吸えない。爆音がなくなればまた走る。

(四) 炊事をするには昼は煙が上がる。夜は光がもれる。夜は照明弾を落とされると直ぐわかる。このような状態にならないよう遮蔽の方法に苦勞しました。

ペリリユ、アンガール両島が玉砕したことを聞く。

四、五日でアメリカ軍が飛行場を作る、その機械化にびっくりす。それより飛行機来襲が甚だしく、どこにいても

安心できない。艦砲射撃で防空壕の入り口に砲弾が落下し、中にいても危険で、コロール島の街は一軒の家もない焼野原となりました。

戦争終結し、捕虜生活も終わり、十四師団最後の引き揚げで浦賀上陸復員す。通算年数現役もいれて十一年七ヵ月です。

## 初年兵の思い出より復員迄

奈良県 岩井幸治

顧みますれば、昭和十八年九月一日全国より選ばれし精銳七五〇人、門司に集結、朝鮮平壤第九十二部隊・第一航空教育隊に現役入隊、軍装一式拝受す。頭に星の輝く軍帽、軍服、腰に帯剣佩用す。

指揮官いわく、お前たちは速やかに宿舎に直行せよ、我々軍服着用、意気軒昂なり。後で鉄拳を食らうとは露しらず、宿舎に直行せず遊廓の前を通り意気揚々と宿舎に向かう。暫く行くと鬼軍曹と出会う。「貴様らはどこ